

公共空間の変容と個人

— ゴッフマン、セネットにみる親密性／公共性の問題構成 —

芦 川 晋

『中京大学現代社会学部紀要』 第14巻 第2号 抜 刷

2020年12月 PP. 1~14

公共空間の変容と個人

— ゴッフマン、セネットにみる親密性／公共性の問題構成 —

芦 川 晋

0、

市民や公共圏といった概念には事実的な意味と規範的な意味がついて回る。素朴に考えれば、市民とは何らかの協同体のなかで暮らしている多くの場合互いに見知らぬ人々であり、必ずしも彼らの利害は共通するとは限らず、相互の調整が必要とされる。公共圏とは互いに見知らぬ人たちが集う領域であり、ここで相互調整がなされる。こうした相互調整は日常の瑣末なことから、政治的な決定まで広がる。しばしば、市民や公共圏といった概念が理念的な意味を帯びるのは、政治の領域が日常生活から分化しており、政治の領域での活動に特別な意味が与えられるからであろう。

しかし、ここではその点はひとまずおいて、市民が日常生活のなかで見知らぬ関係をどのように処理してきたかその変遷を考えてみることにしたい。ついては、18c、19cの市民像をR・セネットの議論に、20cの市民像をE・ゴッフマンのそれに求めて、その特質を検討したうえで、どのような変化が起こったのかを考えてみたい。

1、18c的な公共空間

見知らぬ者たちの集まり

18c、封建的な階層秩序から解放されて都市に集まってきた人々は（後にブルジョアと呼ばれることになるのだが）、自らが何者であるかすら知

らない「雑多な大衆」であり、彼らにとって知らない者同士がどのように互いの関係を作り上げればよいかがということが問題になった。「18cの首都は、人々が見知らぬ人たちとの関係を色づけ、定義しようと大変な努力をした場所だった。問題は、人々が努力しなければならなかったということである」。「都市の市民たちは、自分自身が何であるかのはっきりした焦点を持たなかった。つまり、自分は新しい人間であるが、一体それは何なのか？」[Sennett 1974: 訳 89]。

現在への集中

そこで彼らが行ったことは、互いに対して示されるものはその示されるものに尽くされるように扱うという presentation の戦略であった。例えば、彼らは既存の法令を利用して服装と職業を対応させて、公共の場では外見で互いが何者であることを示し、それをそのようなものとして扱った。セネットは当時の身体を「マネキン人形としての身体」と表現しているが、身体は服装を着るために役立つものに過ぎず、それが何かを表象する記号として利用されることはなかった。また、相互行為で受け取るべきなのは、言葉や身ぶりの表現力であり、「以前に何が起こったか、またこれから何が起きることになっているかに関係なく」それが信じられたのである。公共的な空間は他の領域から独立した presentation の場所なのだ。

匿名的な社交空間

このような presentation のコードを採用することで、彼らは互いのことをさして知ることなく、信頼関係を築くことができたのであり、そこに市民的な公共圏が生じた。彼らが集う場として利用されたのが、よく知られているようにコーヒーハウスであるが、コーヒーハウスのような公共の空間では、誰もが集まりに加わることができ、会話の流れを優先するために互いの身分がレリヴァントでないかのように扱われた。つまり、公共圏では自由な接触可能性 accessibility が保証され、私的なもののレリヴァン

スは奪われたのである。

親密圏

もちろん、ハーバーマスも指摘するように、このような公共圏の成り立ちには親密圏が関わっていた。ハーバーマスは公共圏での主体性の源泉を親密圏での関係に求めている。「情熱的に自己主題化する公衆は、私人たちの公共的論議の中で、さまざまな経験についての意志疎通の啓蒙を求めあうが、これらの経験は独特な主体性の源泉から湧きでるものなのである」[Habermas 1990: 訳 64]。だが、この親密圏を現在見られるような親密な関係と重ねて理解することはできない。公共圏は社会的に制約を受けた「--であるかのように」に演じられる劇場である。これに対して私的な領域は、社会的な制約から切り離された自然な欲求や共感の表現の領域であるとされた。とはいえ、こうした自然な要求や共感も、表現されてはじめてそれと認められるのであり、それは万人に共通するものと考えられていたのである (1)。「個人の性格がもつ偶然的な性質」は、パブリックな場でもプライベートな場でも問題にならなかった」[Sennett 1974: 訳 145]。

2、18cから19cのあいだに何が変わったのか？

二つの個人主義

ジンメルは18cから19cの間に個人主義に大きな変化が見られことを指摘している。18cの個人主義では自然をモデルとし、歴史的・偶有的要素を一切排除した「人間一般」が理想化されていたのに対し（例えばカント）、19cには自我を基盤とする比較不可能な個性が理想化された（ロマン主義）。個人主義は自然な性格から個性へ移行し、それにより外見は「内なる」自己の直接的な表現となった[Simmel 1917: 訳 218] (2)。18cにおいて、公私を区分していたのが、「文化／自然」であったとすれば、19cにおいて公私を分けているのは、ズレを含みつつも「インパーソナルなもの／パーソナルなもの」なのである。

The Fall of Public Man

セネットによれば、こうした公共圏を崩壊させたのが19cの公共圏への個性 personality の侵入である。「外見によって創られ、少しでも統御するものといえ自分の過去についての自意識のみで、異常であることのみによってのみ自発的である個性—こうした新しい条件の個性が前世紀において、社会そのものを個性の集まりとして理解するのに使われだした。個性が首都の公的領域に入ってしまったのはそうした一般的な状況においてだった」[Sennett 1974:218] (3)。

「個性は人それぞれに異なり、個人の内部は不安定である。なぜならば外見は衝動からは離れてはいないからである。外見は「内なる」自己の直接的な表現なのだ。つまり、(自然) そのものと同じく世界のすべての外見を超越する自然な性格とは対照的に、個性は外見に内在しているのである」[Sennett 1974: 訳 219]。

「公の場では、人々は一切目立ちたがらなかった。彼らは人目につきたがらなかった」[Sennett 1974: 訳 232]。「都市に物質的な大変動が起こったとするならば、人々は、群衆に混じり合うことで自分を守ろうと思ったのだ。大量生産された衣服は、人々に混じり合う方法を与えた」[Sennett 1974: 訳 233]。

「公の場での受動的な沈黙は退却の手段であり、沈黙が強制されるほど、それだけあらゆる人は社会の絆から自由なのである」[Sennett 1974: 訳 299]。パブやカフェで労働者階級や中産階級は集会の取り締まりを恐れて無言になった。ブルジョワのクラブもまた沈黙が権利になった。「公の場における個性は、不本意に他人に対して自分の感情を明かしてしまうことを人々に恐れさせてしまうことによって、公的なものを減ぼした」[Sennett 1974: 訳 364]。

3、20cの公共空間

見知らぬ者とどうつきあうか

ゴッフマンにとっても公共生活とは、基本的に見知らぬ人同士で社会的な関係を築き上げることを指す。「およそ（そして疑いもなく正しく）、公共生活への関心が注目する状況は、見知らぬ人々や単なる顔見知りが物理的に互いに接触可能なところである。つまり、秩序が秩序として中心問題となりうるところなのである」[Goffman 1971:8]。しかし、公共の間ではそれぞれが異なる目的を抱いて活動にいそしんでいるから互いの接触は控えるべきものとされており儀礼的な無関心が装われるのがふつうである。

こうして、ゴッフマンは、直接互いに居合わせる相互行為を範型として議論を進めていくのだが[Goffman 1983: 訳 2]、なぜかといえば、それは、互いに居合わせることでコミュニケーションが成立可能になるからである。互いに居合わせることで、言語的なコミュニケーションによらずとも、表出的（つまり、必ずしも意図的ではない）で身体を伴ったメッセージが、とりわけ視覚を通じて再帰化して、つまり、相手に知覚されている（焦点の定まらない相互作用）ということを互いが知覚して、コミュニケーション（焦点の定まった相互作用）が成立する。いわば身体とは鏡であり、我々は身体に映る相手の感情や気分を知ることができる。つまり、我々は互いに居合わせることで、互いが互いにとって意味のある存在となりうる（とされている）のである。

こうした事態をルーマンは、「親密性」と呼んでいる。ルーマンにとって「親密性（＝人と人との相互浸透）」とは、「ある人のパーソナルな体験の領域やある人の身体行動が相手の人にとって、ますます理解可能になり、重要性をおびることになり、自他の立場を変えても同じことが言える場合」のことである[Luhmann 1984:304= 訳 354]。我々の間には互いに居合わせるだけで、親密性が生じうるのである[Luhmann 1984: 訳 759]。

representation

ゴッフマンにとって「present するもの」は常に「present されないもの」との関連性を保っている。ゴッフマンは、直接互いに居合わせる相互行為を範型としながらも、表局域や裏局域の区別、あるいは出会い（相互行為）の内側と「より広い世界」の関係といった形で、その外側の社会領域について言及している。相互行為を通じてそこで何が行われているか明らか accountable になっているとき、当の相互行為との差異によって相互行為の外側 Gesellschaft を考えることができるようになっている。しかも、個人は異なる出会いでは、異なる役割、異なる利害の担い手でありえ、ゴッフマンが強調するように個人がそれぞれの状況で占める立場はしばしば首尾一貫しないし、このような複数の役割の担い手としての自己を調整することが求められる。つまり、個々の出会いと接続する出来事がどれかを相互行為の中で限定していく必要があるのである。「どんな相互行為であれ、この二重のテーマがある。より広い世界が導入されなければならない、だがコントロールされ偽装されたやり方で」[Goffman1963:69= 訳 76]（同様の記述は [Goffman 1967: 訳 11] にも見いだせる）。そこで、ゴッフマンは逆に外部に曝されている成員を互いに出会いの内側に封じ込めておく必要があると指摘している（接触可能な関わりでの取り扱い）。

これは「self-presentation」が representation であることを意味する。このことは「self-presentation」がしばしば失敗して、別のたくらみが明らかになってしまうことによく示されている。つまり、representation では常に present された出来事と他の出来事の関係が問題となりえ、こうした出来事の連関を調整するために印象操作が行われる。このような作業を通じて示されるのは行為者の「真正さ authenticity」である。行為者が present する行為は、行為で present されたことを超えて、行為者の他の行為と関連させて理解されることにより、主観的な色彩を帯びた表象 representation として理解されることになるのである。

セネットが記述してみせる 18c の公共生活の特徴は presentation にあ

り、こうした presentation を通じて互いの関係が作り上げられた。他方、ゴッフマンの記述する現代の（といっても少しばかり前の）公共生活の特徴は、representation にある。もっとも、この用法は混乱を招くかもしれない。ゴッフマンも presentation に類する語を用いているからである。だが、例えば、ゴッフマンは「ディスプレイ」の概念を説明するのにダーウィンの『人間と動物の感情の表現』を持ち出しているが、セネットによるならこのダーウィンの本は外見から内なる自己を読みとる representation のモデルを流用していることになる [Sennett 1974: 訳 243]。

二つの違いは二人が共に採用している劇場モデルの違いを比較すると分かりやすい。セネットによると、18c の観客は上演される芝居の内容をすでに知っており、物語を見に来たというよりは、むしろ洗練された俳優の演技を見に来ていた。『『幻想』は非現実であるという含意がなく、劇場での幻想の創造は、『現実生活』を忘れたり、曖昧にしたり、あるいはそれから退却することではなく、むしろ現実生活に存在する、ある一定の表現力を実現することにすぎない」[Sennett 1974: 訳 120]。つまり、見て取られるのは何かが上演／再現／表象 represent されているということではなく、俳優の表現行為／presentation なのである。だから、舞台の外の俳優が何者であろうとも、それが劇場の内側で問題になることはない。そして、18c の公共圏とはこうした劇場に類比されるものであり、公共的な空間は他の領域から独立した presentation の場所なのである。

他方、ゴッフマンがモデルにする劇場には舞台裏があり、さらには劇場の外側も視野に含まれる。舞台裏では俳優は舞台と異なる立場にあり、劇場の外にはお芝居とは何の関係もない人々がいる。つまり、それぞれの領域はそれぞれ異なる規範が作用している。だが、これらの領域は決して互いに独立したものではなく、役者の私生活のスキャンダルがあばかれるように、それぞれの領域に他の領域の要素が入り込んできて、それがトラブルのもとになるし（劇場に迷い込む部外者）、またさまざまな利害（劇場での殺人）のために利用できる。他の領域は舞台を表象し、領域の交錯は

戦略的な資源になるのだ（「食い違った役割」、「キャラクターから外れたコミュニケーション」）。

印象管理と関与

だから、我々は相手に与える印象を管理しなければならない。公共生活とは印象操作の場所であり、公共生活を規制するのはエチケットのような相互行為を規制する規範である。こうした出来事の連関を調整するために心理学的な資源（の表象）が配分される。我々の身体は常に何かを表現するが、表出的で身体を伴ったメッセージ（身体イディオム）は主として関与のために利用されるのである。関与とは身体的イディオムを通じて示される場面にふさわしい行動への感情的没頭のことである。我々は何かに夢中になったり、醒めたりある場面に何かしら入れ込んでいく。

だが、関与で重要なのは、状況に感情的にコミットしてしまうという事実ではなく、出会いを維持していくために互いに心理学的な資源を配分することが期待されているということである。我々は状況に関与するわけだが、関与表現は他の成員に情報を与え、成員はそれによって期待（予期）を強化することができる。「活動への関与は行為者の目的やねらいを表現すると受け取られるのである」[Goffman 1963: 訳 43]。この過程で親密性が生じていることが分かる。相手の関与へ注目することは相手の「パーソナルな体験の領域やある人の身体行動」がますます意味を持ってきて、それで相手についての評価を下すことになるからだ。関与のコントロールは場面へのコミットを示すために誰もがそのようにすることを期待されている以上、関与は役割に期待されるものであるように見えるが、役割の担い手に還元できない人物、パーソナリティに結びついているのである（関与のコントロールは状況と結びついた作法であって、場面と結びついた作法ではない）。だから、関与をうまくコントロールできるかには個人差が生じる。

もっとも、感情のような心理学的な資源を出会いの構成要素とすること

はかえって不安定要因を持ち込むことにもなる（当惑）。他方で、過度の親密さは出会いにおいても避けられなければならない。体面を保つとは親密性をコントロールすることで成り立つものなのである。また、出会いに加わること、誰かの参加を拒むこと、出会いから離れることが、しばしば厄介になることの一端は、それが親密さの問題をからませてしまうからである。

プライバシーからの撤退

このように、プライバシーとはそれ自体に意味があるのではなく、それぞれが他人のプライバシーから撤退することが信頼の基盤になる。このように事態を把握すると、我々は、一見すると、奇妙な結論に到達することになる。つまり、互いに居合わせる状況においてなすべきことは、互いが親密になることではなく、互いが親密さを回避することである、と。そして、各自にこうした個人の領域を残しておくことが互いの信頼の条件になる。こうしたことを顕著に示しているのが、「儀礼的無関心」である。儀礼的無関心とは要するに見知らぬ相手と一瞬目があっても、すぐに互いに素知らぬ振りをするのであるが、それは見知らぬよそ者の感情が自分に入り込んできて、プライバシーが侵害されないようにするためだとされる [Baumann 1990:87]。たとえば、見知らぬ人と二人切りでエレベーターに乗り合わせて緊張するのはなぜなのだろう？ 儀礼的無関心とは何よりも互いが互いについて知覚しているかもしれないこと、生まれ始めた親密性のレリヴァンスを無効にする儀式なのである。ギデنزの儀礼的無関心が見知らぬ人同士の信頼の条件になると指摘するが、それは儀礼的無関心が親密性を回避しているからなのである [Giddens 1990: 訳 104]。

儀礼的無関心が見知らぬ人同士の信頼の条件であるとすれば、見知らぬ相手と接触することが極めて労力を要する作業だということは容易に理解できる。まして、相手がいかなる領域を抱えているかは分からない。町の中で声をかけられるのは、大抵キャッチセールスや宗教の勧誘の類だった

りする。だから、我々の社会で見知らぬ人と出合いを始めるチャンス、つまり接触可能性 accessibility は大幅に制約されていることは理解しやすい。とりたてて理由もなしに接触できる人 Exposed position、接触してよい人 Opening position は、主として警官のような公共の場を維持する役割の担い手や子ども・老人といった公共の場にいる無害な人たちなのである。我々は見知らぬ人とつきあう術を著しく欠いているのだ。

このように、親密性は単に互いの接触を規制する要素であるのみならず、相互行為を遂行していくために必要不可欠な資源なのである。各人を媒介する資源として親密性が利用されることで、社会的に媒介される関係は、なにがしかパーソナルな意味合いを帯びたものになってくる。

その都度の相互行為、やりとりのなかで、インパーソナル／パーソナルの境界を調整しながら、互いの信頼関係が確認される。そして、この境界に引かれ方に応じて、ある関係が私的であったり公的であったりする。インパーソナル／パーソナルの境界設定はその都度自分が何者であるか、何をしているかをアカウンタブルにしていく過程なのである。

- (1) アダム・スミスにおいては「快樂／苦痛はもはやそれ自体として問題であるというよりも、それを巡る提示と評価（是認／否認）の社会的レヴェル（＝言説）と不可避に絡まりあったかたちで問題化される。それどころか、自己提示のレベルこそが、ある意味で本質的であるとする転倒が生じている」[遠藤 1992:145]。
- (2) この違いを L・トリリングは、ディドロの『ラモアの甥』の中での私（ディドロ）とラモアの対比を通じて鮮やかに示している。また、類似の指摘として、バーガーは近代において個人を評価する概念として階層的秩序に結びついた名誉から、個人の社会的な属性の背後にある人間性に根ざした尊厳への移行が生じたことを指摘している。
- (3) すでに 19c 初のブルジョア刊行物の語り口を見ると「党派的偏向性、罵詈雑言、教条主義、裁判的語り口、大上段に構えた決めつけの姿勢」なしには批

評行為が成り立たないような状況であり、「公共圏の空間はもはや上品な合意に達する場ではなく、激しい論争の場と化していた」[Eagleton 1984: 訳 51]。過去と未来を含み込んだ厚みのある現在が19c 末に現れてくる経緯については[Kern 1983]を参照のこと。

【文献】

- Berger, P.& B. & Kellner, H., 1973, *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*, Doubleday. 訳高山真知子・馬場伸也・恭子『故郷喪失者たち－近代化と意識』新曜社 1977。
- Robbins, Bruce (ed), 1993, *Phantom Public Sphere*, U. of Minnesota P.
- Calhoun, Craig (ed.), 1992, *Habermas and the Public Sphere*, MIT. 山本啓・新田滋訳『ハーバーマースと公共圏』未来社 1999。
- Eagleton, Terry, 1984, *The Function of Criticism*, Verso. 訳大橋洋一『批評の機能』紀伊國屋書店 1988。
- 遠藤知巳、1992、「ディスコースとしての〈幸福〉：近代の記号空間の社会学」『ソシオロギス』16。
- 遠藤知巳、1993、「親相学的身体の成立－記号の系譜学に向かって－」『ソシオロギス』17。
- Fraser, Nancy, 1991, *Rethinking Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy*, now in 1997.
- Fraser, Nancy, 1992, *Sex, Lies and the Public Sphere: Reflections on the Confirmation of Clarence Thomas*, now in 1997.
- Fraser, Nancy, 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the Postsocialist Condition*, Routledge.
- Fraser, Nancy, 1995, *Politics, Culture, and the Public Sphere: toward a postmodern conception*, in Nicholson, L. & Seidman, S. (eds.), *Social Postmodernism: Beyond identity politics*, Cambridge U. P.
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequence of Modernity*, Polity. 松尾精文・小幡正

- 敏訳『近代とはいかなる時代か？－モダニティの帰結－』而立書房、1993。
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford U. P.
- Giddens, Anthony, 1992, *Transformation of Intimacy*, Polity. 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房 1995
- Goffman, Erving 1959 *The Presentation of the Self*, Doubleday. 石黒毅訳『行為と演技』誠信書房 1973。
- Goffman, Erving 1961 Fun in Games, in *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Bobbs-Merrill. 佐藤毅・折橋徹彦訳「ゲームの面白さ」『出会い』誠信書房 1985。
- Goffman, Erving 1961 Role Distance, in *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Bobbs-Merrill. 佐藤毅・折橋徹彦訳「役割距離」『出会い』誠信書房 1985。
- Goffman, Erving 1961 *Asylum: Essays on the Social Situation of Mental Hospital and other Inmates*, Doubleday. 石黒毅役『アサイラム』誠信書房 1983。
- Goffman, Erving 1967 *Interaction Rituals: Essays on Face-to-Face Behavior*, Doubleday (now by Pantheon). 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版会 1986。
- Goffman, Erving 1963 *Behavior in Public Places: Note on the Social Organization of Gatherings*. Free Press. 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造』誠信書房 1980。
- Goffman, Erving, 1971, *Relations in Public: Microstudies of the Public Order*, Basic Books.
- Goffman, Erving, 1979, *Gender Advertisement*, Harvard U.P.
- Goffman, Erving, 1983, Interaction Order: American Sociological Association, 1982 Presidential Address, *ASR* vol48.
- Habermas, Jurgen, 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Suhrkamp. 訳細谷貞雄・山田正行『公共性の構造転換』未来社 1973 (2 版 1994)。

Habermas, Jurgen, 1979, The Public Spher: An Encyclopedia Article(1964), *New German Critique*16

花田達郎、1996、『公共圏という名の社会空間』、木鐸社。

Hohendahl, Peter, 1979, Jurgen Habermas: The Public Sphere, *New German Critique*16

Hohendahl, Peter, 19, Critical Theory, Public Sphere and Culture. Jurgen Habermas and his Critics, *New German Critique*16

金子郁容、1992、『ボランティア—もう一つの情報社会—』岩波書店（岩波新書 235）。

姜尚中、1990、「公共性の再興と対話的合理性」藤原・千葉編『政治思想の現在』、早稲田大学出版部。

Kern, Stephen, 1983, *The Culture of Time and Space 1880-1918*, Harvard U. P. 浅野敏夫訳『時間の文化史—時間と空間の文化：1880-1918/ 上巻』法政大学出版会 1993。

木前利秋、1987、「理性の行方—問題設定と視座—」、藤原・三島・木前編『ハーバーマスと現代』新評論。

Luhmann, Niklas, 1982 *Liebe als Passion :Zur Codierung von Intimität* . Suhrkamp. 佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛』木鐸社 2005。

Luhmann, Niklas, 1986, The Individuality of the Individual: Hisotorical Meanings and Contemporary Problems, in *Reconstructing Individualism: Autonomy, Individuality, and the Self in Western Thought*, Stanford University Press, California 土方透・大澤善信訳「個人的なるものの個的存在性—歴史的意味および今日の諸問題—」『自己言及性について』国文社 1996。

Luhmann, Niklas, 1984 *Soziale Systeme :Grundriss einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp. 佐藤勉（監訳）『社会システム理論（上）（下）』恒星社厚生閣 1993/1995。

森元孝、1990、「『公共性の構造転換』とその機能主義的帰結—公共性、公開性、〈市民〉の析出—」社会科学討究 36-1(104)。

Ryan, Mary, 1991, Gender and Public Access: Women's Politics in Ninteenth-

Century America, in Calhoun 1992.

齋藤純一、1987、「政治的公共性の再生をめぐって－アーレントとハーバーマス－」、
藤原・三島・木前編『ハーバーマスと現代』新評論。

齋藤純一、1992、「批判的公共性の可能性をめぐって－親密圏のポテンシャル－」、
小野紀明他『モダンとポストモダン：政治思想史の再発見 1』木鐸社。

齋藤純一、2000、『公共性』岩波書店。

阪本俊生、1995、「プライバシーとコミュニケーション－近代社会のフレーム化
のタブー－」『ソシオロジ』40-2(124)。

阪本俊生、1995、「プライバシーの解釈学」『南山経済研究』10-1。

Schutz, Alfred, 1932, *Der Sinn Aufbau der Sozial Welt: Eine Einlaltung in der
verstehende Soziologie*, Springer. 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸
社 1982。

Sennett, Richard, 1976, *The Fall of Public Man*, Knopf. 北山克彦訳『公共性の喪失』
晶文社、1991。

Simmel, Georg, 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der
vergesellschaftung*, Duncker & Humblot. 居安正訳『社会学』白水社 1994。

Simmel, Georg, 1917, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*. 清
水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波文庫 1979。

The Black Public Sphere Collective (ed), 1995, *The Black Public Sphere*, U. of
Chicago P.

Trilling, Lionel, 1972, *SINCERITY and AUTHENTICITY*, Harvard U. P. 野島秀勝
訳『〈誠実〉と〈ほんもの〉－近代自我の確立と崩壊－』法政大学出版会 1989。

和辻哲郎、1962 (1937/42/49)、『倫理学①②』(和辻哲郎全集 10-11) 岩波書店。

Robbins, Bruce (ed), 1993, *Phantom Public Sphere*, U. of Minesota P.